

SY2-3

笑顔の子どもを育む地域創りのひとつとしての予防接種

是松 聖悟

埼玉医科大学総合医療センター小児科

大分県は2008年度に大分大学医学部に寄附講座の担当教授が県内各地域を巡回し、その地域が「子育てしやすい地域、笑顔の子どもを育む地域」となる活動を委託した。その活動は感染症予防、神経発達症支援、アレルギー対策、医療的ケア児支援など多岐にわたり2020年度まで継続された。ここではその活動のうち、感染症予防に焦点をあてて講演する。

2007年度、大分県はMR（麻しん風しん）混合ワクチン2期の接種率が全国最下位（79.6%）であった。それを契機として大分県医師会、大分県小児科医会、日本小児科学会大分地方会は予防接種率向上のキャンペーンを開始した。日本小児科学会主催ワクチンフォーラムを誘致し、2009年度～2012年度に地元新聞の協力のもと月1回の紙上講座「みんなで守る子どもの健康と成長」を開講し、感染症の解説と予防接種の必要性、安全性を発信した。大分県各地で市報やケーブルテレビを活用し、感染症予防の重要性を説明する連載を開設した。最も長期に連載を継続している津久見市では2020年度まで150回を超えた連載となっており、津久見市はそれを冊子にして小児のいる全家庭に無料配布している。

竹田市では、2006年度より、当時、任意予防接種であった水痘、おたふくかぜワクチンの公費助成を開始した。それぞれの予防接種率は、公費助成前は25%未満であったものが公費助成開始後に60%以上に上昇し、罹患児数はそれぞれ従来の10%程度に減少した。さらに年間約800万円の費用対効果が得られた。大分県では、2014年度の水痘ワクチン定期接種化以前に、18市町村中12市町村で水痘ワクチンの公費助成が開始された。各市町村で予防接種率の5～10倍の増加と、水痘罹患児の1/5～1/2の減少がみられた。

中津市は2016年度からロタウイルスワクチンの公費助成を開始した後、予防接種率は増加し、ロタウイルス胃腸炎による入院患者数と入院医療費は公費助成後に有意に減少した。2018年度は推定総医療費と推定保護者生産性等損失額に推定予防接種費用を加えても、予防接種導入前の4年間と比較し、年605～5,767万円の費用対効果が得られたと推定された。

最近では、日本小児科学会が小学生における抗体価低下と罹患率増加を受けて、就学前の三種混合ワクチンとポリオワクチンを任意接種として追加接種することを推奨している。それを受け2020年度までに国内で4つの市町がこの2つのワクチンの公費助成を開始した。うち3市は大分県津久見市、竹田市、津久見市で、高い予防接種率を維持している。

このように予防接種は感染症対策のみならず、地域を活性化させる効果もある。笑顔の子どもを育む地域創りのひとつのツールであることを示した。